IAPL 2nd conference
March 6th - 8th, 2009　University of Victoria (CANADA)

（パネル）

演劇を科学する

後安美紀

私は、平田オリザさんの主宰する青年団の作品に魅せられた心理学者です。その 創作の秘密を知りたいと思い、一つ一つの作品が出来上がるまで稽古の全過程をビデオテープやフィールドノートに記録してきました。１９９７年の『バルカン動物園』以来、そのようにして記録された作品は合計７作品にのぼります。私の研究室には大量のビデオテープの山があります。この執拗な情熱はどこから来るのでしょうか。思い当たる節はいろいろとあるのですが、このトークでは、私の専門とする生態心理学や認知科学から見て、演劇の創作過程を研究対象とする必要性がいかに高いものであるかということをまず最初にご説明申し上げたいと思います。そして次に申し上げたいのは、これが一番お伝えしたいことでもあるのですが、稽古の解析結果そのものの面白さ、不思議さです。日常的に考えられている学習の効果とは反対の効果が「表現」学習にはあるようです。以下にそのポイントをまとめます。

（１）機械のように正確な演出

平田オリザさんは演出の際、まるで機械のような正確さで、一定の基準に基づいた指示を俳優たちに与えていました。指示の内容でいえば、セリフを言うタイミングやスピードなど、俳優が物理的に(physical)どう行動すればいいかを指定するタイプの指示が大半です。

（２）稽古をすれば、パフォーマンスがほどよく乱雑になること

（１）のように厳密な指示を与えられた俳優のパフォーマンスは、どんどんと正確さ安定感を示すかといえばそう ではありません。むしろ反対に、稽古が進行するにつれてマイクロスリップ(microslips) と呼ばれる行為の揺らぎ(fluctuation)が増えたり、発話タイミングのパターンがより乱雑 なものになっていっていました。

（３）２人芝居のほうがパフォーマンスの不確定性が高いということ

登場人物が少ないほうが簡単にお芝居をできるかといえば、そうではありませんでした。２人のパフォーマンスシーンのほうが毎回異なる発話タイミングパターンを示し（つまり乱雑度は高く）、多人数によるパフォーマンスシーンのほうが構造化されたパターンを示す傾向にありました。